

仏教文学会二〇二〇年度十二月例会  
《シンポジウム》「東アジアの中の『日本霊異記』」

近年、国文学の分野においては『日本霊異記』についてのシンポジウムが行われ議論が深められ、東アジア世界での位置づけの重要性が明らかとなってきた。しかしながら、近年の研究では、表現や思想的な影響関係を中心に検討されており、『日本霊異記』の東アジア世界の中での歴史的な位置づけや、宗教書としての側面、加えて『日本霊異記』の成立についての議論は、必ずしも十分深められていないように思われる。

そこで本シンポジウムでは、上記課題について、東アジア世界をキーワードとして、歴史学・国文学・思想史のそれぞれの方法論と視点を活かしたかたちでアプローチすることにより、論点の多様性・学際性を見出し、今後の新たな『日本霊異記』研究の方向性を考える機会としたい。(藤本誠)

\*

\*

\*

仏書としての『日本霊異記』

名古屋市立大学教授 吉田一彦

『日本霊異記』はどのような書物だろうか。近代日本の人文学において、『日本霊異記』は長く説話文学の書物と位置づけられ、読まれてきた。私は、歴史学の視座から、『日本霊異記』は歴史を考える史料として大きな価値を持つと論じてきた。その考えに変化はない。しかし、あらためて考えてみるに、著者景戒は『日本霊異記』を文芸書として書いたわけではなく、また歴史書として書いたのでもない。『日本霊異記』は仏法を広く流布せしめるための仏書(仏法書)として書かれている。ただ、宗教を文学的に語っていたり、その外面的記述が奈良平安時代の史料として、また内面的記述が仏教史の史料として活用できるということであろう。では、仏書としての『日本霊異記』を東アジアの仏法の世界の中で見ると、どのような位置にあるのだろうか。よく知られているように、景戒は上巻序で、中国の『冥報記』『金剛般若経集験記』を意識したとする記述をしている。小論では、『日本霊異記』がどのような位置にあるのかについて考察する。

仏教類書と『日本霊異記』と

京都府立大学准教授 本井牧子

『日本霊異記』との影響関係が論じられる中国の典籍としては、本文中にその書名が明記される『冥報記』『金剛般若経集験記』はもちろんのこと、『衆経要集金藏論』(『金藏論』)『法苑珠林』『諸経要集』といった仏教類書とも呼びうる典籍もまた、組上に載せられてきた。直接の典拠としての指摘のみならず、下巻二十八縁において景戒が夢中に授けられた『諸教要集』なる書との関わりといった、『日本霊異記』撰述自体に関わる部分についても

論じられている。さらには、興福寺本が『金藏論』の紙背を利用して（『金藏論』を「本垢（反故）」として）書写されているというありかたなども、さまざまな想像をかきたてるものである。本発表では、仏教類書の編纂意図や構成をはじめ、経蔵における位置づけ、後世における受容の様相をも視野に入れた上で、あらためて『日本霊異記』との関わりをかんがえてみたい。

### 〈現前〉する観音菩薩―『日本霊異記』の観音靈験譚をめぐって

東北福祉大学講師 富樫 進

日本における観音信仰は、『法華経』観世音菩薩普門品（『観音経』）やそこから派生した種々の密教経典に基づく現世利益信仰をはじめ、『観無量寿経』『無量寿経』に顕れた来世救済の側面、『華嚴経』入法界品に基づく普陀落信仰などの要素によって構成されている。一方、『日本霊異記』には合計一二六の説話が収録されているが、うち観音の靈験について語られる説話が一六話と他の仏菩薩や諸天衆に比して圧倒的に多く、観音信仰が幅広い階層に浸透していたことを窺わせる（堀池春峰「観音信仰と修二会」）。『霊異記』における観音信仰については既に多くの先行研究が存在するが、本発表では、『日本霊異記』所収の各説話において、観音が衆生の眼前に〈現前〉するという現象（？）の表現分析を通じて、観音菩薩と人々との間の交感がどのように描かれているかを検討する。先述の諸経典や中国の観音靈験譚をはじめ様々な史料を援用することで、古代前期における仏菩薩のイメージを具象化する手掛かりを獲得したい。

### 『日本霊異記』の成立と東アジアの仏教

慶應義塾大学准教授 藤本 誠

本発表では、『日本霊異記』の成立について、東アジアの仏教史料、とりわけ中国仏教史料との関係、及び『日本霊異記』所収説話の本書における位置づけという二つの側面から考察を加えたい。これまでも指摘されてきたように、『日本霊異記』の序文・跋文によると、『日本霊異記』の宗教実践書としての側面が明確である。加えて上巻序文からは『冥報記』と『金剛般若経集験記』から影響を受けたことが記されている。そこでまず『日本霊異記』と両書を含めた中国仏教史料の序文とを宗教実践の側面から比較検討し、その特徴を指摘したい。また『日本霊異記』の各説話については原資料が存在し法会の説法で語られた可能性が指摘されてきた。そこで平安前期に成立した法会の説法の手控えと関わる史料とされる『東大寺諷誦文稿』にみえる宗教観と、景戒の宗教実践の関係を考察したい。以上の二つの側面からの考察を踏まえ、『日本霊異記』の成立背景について考えてみたい。